

『第一章』について

昭和五十五年九月十三日

於 盛岡市・中央公民館

一、念仏・名号・往生

いま読ませて戴いている曾我量深先生の『歎異抄聴記』は、昭和十七年七月十一日から、ご本山で行われた安居でのお話の記録なのです。先生は、おそらく最初にプランを立てて、ある程度草稿をちゃんと綴って、それから、一ヶ月連続の講義に出られたのだらうと思うのですが、曾我先生の頭というのはどこが始めだか終わりだか分からないというのかな。大きな龍でいうと、どこにも頭があり、どこにも胴体があり、どこにも腹があるとそういうので、そこへ入ってしまうともうそこだけで、出どころがないような気がする。

去年の第一回からズット、ここまで来たのですけれども、一体どこを歩いて来たのか自分でもさっぱり分からない。第一章から入ったには違いないのだけれども、やはり今もって第一章とこういふ訳ですね。

今日は、第一章の眼目というのは「弥陀の誓願不思議」と、もう一つは『南無阿弥陀仏』の名号」、この二つが、

言わば二本柱である。もともとこれは、二つに分かれたものではなしに、一つのものに違いないのだけれども。

いったい「信」というものはそういうものなのでしょうね。つまり、「願」がある。願があるというだけでは、これはまだ外へ出て来ない。その願が何らかの形で外へ姿を現してくる。現して来るのでなければ分らない。それが「名号」である。

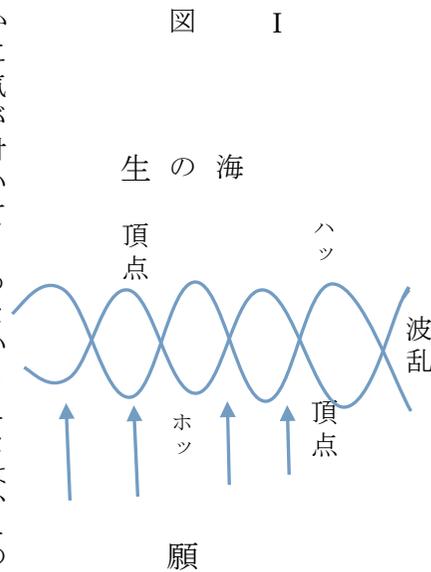
我々のこの「生」というもの、生きていくというのは、現実であり現象である。現実界である。現象として生きている。五十年、八十年をこういう姿で今日まで歩いて来たわけです。願ということは一向知らないで生きていくのだから、そしてどこかで亡くなってしまえば、それで終わりである。それで良いはずなのである。まあ、良いとか悪いとか言ってみたっておっつかない。これだけのことなのである。このほか何も用がないといえ、用はないのでしよう。

こういう世界だけならば、「信」という問題が出てこない。それは、生の世界の中で信ずるとか信じないとか、人を信じるとか、信じないとかいうことはあるけれども、それは「生死」と共に消えてしまうものです。信ずるときには既に疑っている。疑っているから信ずるのである

という世界だけのことである。

この世界だけならば、宗教の世界は出て来ない。

ところがこういう人生において、何か、いつか、この生が生自身の奥に、「願」に気がつく。「生」は生だけであるのではなく、生という現象の世界がそれだけであるのではなしに、この奥に何か「願」があるのだと、ほのかに気が付いてくる。



ほのかに気が付いてくるということは、この生の歩き方が、この生の海が、こういうように静かではなしに、しよっちゅう、こういう波乱を繰り返している。生の波が毎日毎日朝から晩まで一日中静かではない。しよっちゅう、こういう波を打っていく。その打つ波の頂点・

頂点のどこかで何か、こう触れるものを感じる。「ハッ」「ハッ」と思われるものがある。

日ごろは、悲しいとか、嬉しいとか、憎いとかというだけで一応終わっているのだけれども、それを繰り返しているうちに、何かこう「ハッ」と手応えがある。

「何くそっ！」と思っってこう手を振っていたら、何かの拍子に向こうにドーンと突き当たるような感じがする。手応えがあるような感じがする。叩いたつもりはでないが、何だかこう叩いた感じがする。上から叩いた時になんだか向こうから「ホッ」と答えてくれるような反動を感じるといふようなことがある。

悲しいときなら、悲しいことを突き詰めていったときに、悲しい底でなにか「底」というものを感じることがある。嬉しいと言っって喜んだ後に、言い知れぬ淋しさがある。たとえば、花見にでも行っって、子供の頃やはりそのような感じがありますね。行っったときには非常に楽しいのだけれども、夕方になっって帰ろうとするときに、妙に淋しさが出て来る。子供なら子供なりに淋しさが感じられる。

そういう何か、生の波乱の頂点で感じさせられるもの。結論的にはそういうものを頼りとして、願というものを

感ずる。逆に言うならば、そこに願と接触しているところがある。しかしまだこの願の本体というものには気が付かない。

叩いたと思うと、叩いたのではないのだが、叩いたように向こうから手応えがくる。それだけに終わる。そのときに誰か人がいて教えてくれる。

「それは手応えなのだよ、君が叩いたつもりではないのだが、叩いたと思ったときに何か手応えがあるのは、それは叩いたら向こうから開いてやろうという力がそこに来ているのだ。君は相手を殴ったかもしれないけれども、殴ったというときに実は向こうから、それを受け容れてくれて、それによってこちらへ開いてくれる。君の怒りの心を。」

怒りというのは一つの障壁でしょうね。自分が障壁にぶつかっている。障壁を破ることが出来ないから腹が立つ。破らなくてもいいのだと。その怒りの心をそのままこっちへ取ってやろうと。つまり戸が開かないものだから「くそっ」と思ってその戸を叩いているのだが、叩いたらすぐ戸を開いてくれる。「叩けよさらば開かれん」と言うでしょう。この叩くのと開くのとは一つなのです。実は開いて待っているのだと思う。開かれているのだ、

と。それを、開いているのが目に見えないものだから、「くそっ」と思って叩いたりするのだが。怒りなら、怒って相手を殴ったつもりだが、実は殴ったのではないのであって、殴られるものは何も無い。戸はすでに開かれているのだから。開いた戸を殴ったり叩いたりする。そうでなく既に開かれている。そういうことを誰か教えてくれる人が必要である。

これはこういうものなのだと教える人、それを善知識と呼んでいるのです。これが現実の人でもあり、あるいはお経でもある。あるいは善知識の教えである。お経によって教えられるかも知れない。

ところで教えられただけでは、教えられたその時には分かるのだけれども、分かっただけでは後が続かない。「ああ、分かっただけ」と思うけれども、その分かり方をどのように持ち続けていいか分からない。そういう「願」そのものを、何とかその願の心がこちらに届いたときに、何によって持ち続けるか。それが「名号」なのである。「南無阿弥陀仏」という仏の名なのである。

だから、生がこの線（図Ⅱ 線a）にぶつかって、この線を挟んで、あるいはこの線があることに気がついたときに願が分かり、その願の教えによって「名号」を教

えられる。願と名号とはひとつなのである。「誓願の不思議」というのは生の中にはないからということなのでしようね。生を超えているというのですから、向う側からである。

この生の世界の中には不思議はない。皆分かっている現象である。分かっても分からなくても現象であって不思議はない。

誓願の不思議な力がこちらに届いたときに、その時に同時に名号も一緒に出てくる。願というならば一般的な話しのようですが、親子の関係で言うならば親心がどういう名号を持っているかと言えば「お母ちゃん」という言葉が一つの名号ではないでしょうかね。

「お母ちゃん」と言える子は、もう自分だけの世界ではないということが分かっているわけである。何か自分の奥に子どもだから自覚はないでしょうが、親の願と自分のいのちとがつながっているということが分かっているわけである。それを「お母ちゃん」という言葉で呼んでいる。だから、子供の生活というのは「お母ちゃん」という呼び声でズーツと続いているわけである。

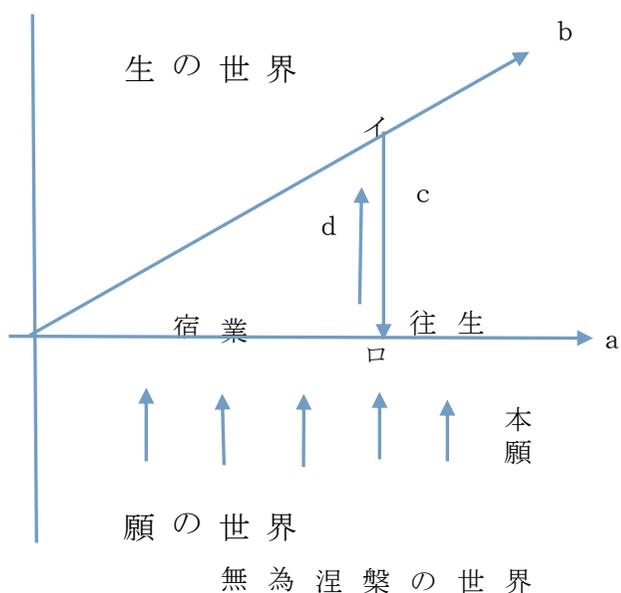
今日も汽車に乗って来たたら、私の横にまだ幼稚園くらいの子供が一人座って来て、満員だったのでお母さんが

一緒に座れなくて私の後ろの席に座っていました。矢巾でしたか途中から乗ったのですが、盛岡へ来る間中子供は一生懸命窓の外をみている。だけれどときどき「お母ちゃん」と後ろ向いて呼んでいる。それだけではまだ何だか足りないとみえて、ときどき座席を離れて後ろへ廻って「お母ちゃん」と確かめて、それでまた帰って来て一生懸命窓の外を見ている。

つまり子供の心には分からないけれども、親の願が生きていて、子供の口からはその願が「お母ちゃん」という名号でつながっている。「お母ちゃん」と子供が言っている限り、子供は汽車の中で安心して生きている。安心して窓の外を一生懸命見ている。盛岡に着くころになったら、眠くなったとみえて後は首を垂れてグッスリ寝込んでいました。そうすると今度はお母さんの方から、「○○ちゃん。もう盛岡に近いんだからね。寝てはだめだよ」と後ろから声をかけておりました。

この関係を一番初めに、第一章では「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じ、念仏まうさんとおもひたつこころのをこるとき」と、こういうように述べておられる。

図 II



そこで問題なのは、願と念仏との間に「往生をば」と、「往生」という言葉がある。この「往生」とは何ぞやという問題なのです。そうすると、それをこう画いてみるとよく分かる。「往生」とはこの線（図IIの線a）のことなのでしょね。この線のことを往生なのである。この線というのはどうして出て来るかと言うと、生の世界願の世界との関係から出てくる。

生だけの世界では先に申しました「現象の世界」だけでは、往生というこの線は出て来ない。願の世界が出て来て、願と生とが結び付いたときに、この線が出て来る。

「叩けよ。さらば開かれん」と言ったときに、叩かないときには戸はないのである。扉はないので、叩くといふときに同時に戸がそこに出て来る。戸は障壁でありながら同時にそれが救いなのでしょね。

往生というのはこの線上が往生なのである。つまり生そのものが往生なのである。この線とつながって我々は毎日生きている

線上で生きて行くのですから、この生が終わってから往生が始まるのではないのでしょね。この生そのものが往生なのである。

そこで問題は「願」と「名号」と、それを一つにした「往生」と、この三つのことが一応問題になる。それから「教え」というものは今しばらくはこの問題としては出て来ない。この三つの関係が、第一章の構成と云っていいのでしょね。

名号というのは、「やすくたまち、となへやすき名号」（第十一章）難しいことは言わぬ。「お母ちゃん」という言葉でいいのだと。「お母ちゃん」という言葉でいい。名

号の本質はそうなのである。「やすくたもち、となへやすき」ということが名号の性格である。「この名号を称えた者をむかえとらん」約束である（第十一章）。「お母ちゃん」と呼んだところに、私がおりますよ。どこにも行きはしない。「お母ちゃん」と呼べそこに私は居るよと。

「私は居るぞ」ということは私の中にお前がいるぞということである。それが本願である。その約束というのは、これは「廻向」である。汽車に乗っているお母さんが、私の後ろに座って居る訳であるけれども、子供は私の横にいる。けどお母さんはいつでもちゃんと、子供の後ろに座って子供を見守ってくれている。見守ってくれているということ、子供の方から言えば、子供の心の中には「お母ちゃん。お母ちゃん。お母ちゃん」と、汽車の進行とともに、「お母ちゃん。お母ちゃん。お母ちゃん」という心が生きて動いているわけである。生きて動いているということはお母さんの心が子供へ次から次に「お母ちゃんはこの中にいるぞ。お母ちゃんはこの中にいるぞ」と、その心が子供の心へ廻向されている訳ですね。

子供の心が、お母さんの方へ「お母さん。お母さん。お母さん」と行っているのですね。子供はお母さんが後ろにいるだけで、見なくてもちゃんと安心して、見も知

らない僕の横で安心して外を見ている。それを後ろからお母さんの心がズーッと汽車の進行と共に、進行してきている。子供がそういう形で親の廻向を受けて安心して汽車に乗っているということ、それが往生である。

それがそのまま往生である。子供はちゃんとそこに往生している。生が生として働いている。生が生として完全に百パーセントの生として生きていくわけである。つまり安心して汽車に乗っている。そうするともう時間が経って、おのずから時期がくれば盛岡駅に汽車が着く。それでお母さんが寝ている子を起こして、「さあ。降りるのだよ」と言って手を引いて降りて行きましたが、まあ往生が完成した訳でしょうか。

そこで、「往生をばとぐるなり」というその往生は、そういう意味ですから、これ自体の往生だから いわゆるこの世ながらの、現世成仏ではない。即身成仏ではない。それは聖道門である。聖道門では即身成仏ということとを言う。・・・（テープ中断）・・・に成るのはこの臨終で仏に成るのだけれども、この世ながら往生すると、この世のままに往生するということは「無生の生」である。生でありながら無生の世界との交渉、だから往生というのは無生に入ることである。あるいは無生に入らせ

てもらふことと言つたらいいでしょうか。

二、撰取不捨の利益

子供が親の心と親のいのちとつながること、それを「廻向」という。無生に入ること、これが廻向である。つながりができることが廻向なのである。別の言葉で言えば往生は無生ということ、つまり「無為の大涅槃」である。大涅槃とは常住の世界に入ることである。常住の世界をテーマにしているのが『涅槃経』ですね。

常住の世界と現世とが一つになって、真ん中の線（線 a）がズーツと時間と共に進んで行く。それが現世の我々の生き方なのである。

「往生をばとぐるなりと信じて」の信は信知である。あるいは深信である。つまり、こちら（線 a の下の世界）は無為の世界であり、無為涅槃の世界であり、こちら（線 a の上）が現世であると言つた場合に、この線（a）は何であるかという、これが「知」であると。つまり信は知である。これが仏教の特色だと言われていますね。仏教の教えを知で表している。智慧で表している。

知であるということは「愛」と言わないということである。知の後ろに、知と相關的に「慈悲」というものが

あるのですけれども、表に出すのはむしろ智慧である。無為涅槃の世界と生との間の線を知で表している。だから、仏教の信というのは知である。

これは、よほど我々の生活態度の中に、仏教的な生活態度とでも言おうか、それを言うときに否応なしにそういう型というものがある。それが愛とどう違ふかという、これは私の肩入れがあるかも知れないけれども、知というよりはやはり本質は物を見るところという立場になりませんか。愛といえばすぐ向こうに対して働きかける。つまり働きが最初になるのではないかと思う。

ところが知というと、向こうとこっちとの間に光という関係で、知るといふのは光でしょうから、こちらも光らなければならぬし、向こうも光があるから、こちらから見ても分かる。つまり光というものを通して関係をもつて行く。つまり愛の方はすぐに向こうにぶつかって行く。つまり行い、実行というものが先になるのではないかと思えますがね。そういう仏教が知的であるところにプラスもあれば、またマイナスもあるのでないかと思うのです。

「往生をばとぐるなりと信じて」この深信ということ、また後で出て来るのですけれども、深く信ずる。深

信は表面的、外面的にものを知るといふ知識ではない。もつと知ることが内面的に深まって行く、つまり自覚の「知る」なのでしょね。

「とぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつころのをこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり」、の「撰取不捨の利益」というこの言葉は、『観無量寿経』に出ている言葉。普通には『観経』と言っているお経ですね。その第九観に、たくさんの仏様が、無量寿仏が八万四千のいろいろな相（かたち）をつくって、その八万四千の相から更に細かい相ができる。そのいちいちの眼とか、鼻とか、口とか、肩とかあらゆるところから、また八万四千の光明が出て、あまねく十方の世界を照らして念仏の衆生を撰取して捨てない、「一一光明。偏照十方世界。念仏衆生。撰取不捨」。一つはこれから出ているのだらう。

それからもう一つは『大無量寿経』、これは普通『大経』と言っているのですが、このお経の下巻の一番初めのところに「願成就之文」と言われているところにある。第十八願では救うと誓ったわけだが、そのその救いが出来上がったか、出来上がっていないかということ、そこではまだハッキリしていない。

『大無量寿経』の上巻の第十八願のところでは、一人残らず救おうという誓ったわけだが、その誓いが成就したとはまだ書いていない。それが下巻の初めのところには、出来上がったという形で書いてある。このところを「願成就の文」と呼んでいる。そこに「諸有衆生、聞其名号、信心歓喜、乃至一念、至心廻向、願生彼国、即得往生（これは撰取不捨ですね）、住不退転」と、こういう言葉がある。

親鸞聖人は、『観経』の「撰取不捨」と、『大経』の「聞其名号、信心歓喜、乃至一念」、この両方を念頭において、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて・・・」という言葉をおしゃつたのであるうと曾我先生は言っておられますが、なるほどそう言われてみると、この両方が一つになって第一章が出来上がっているのですね。

（これは撰取不捨ですね）、住不退転」と、こういう言葉がある。

先の（図Ⅱ）で言うと、いまの関係がよく分かりますね。つまり我々の現実の現象の世界が、不思議に「念仏まうさんとおもひたつころのをこるとき」、そういう心が起こったときに、「撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり」。このところが「すなはち」である。

「おもひたつところのおこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり」

この線（a）は往生の線である。「往生をばとぐるなりと信じて」という、この往生のこの線が信の線である。この上の世界と下の世界との関係ができなければ「信」というものはあり得ないわけですね。つまり現実の我々のこの生の世界には信はない。信は出て来ない。上と下の世界の接点において「すなはち」というときに、そこに信が生まれる。

三 「老少善悪のひとをえらばれず」

その信の具体的な内容は何であるかというところ「往生」なのである、「往生をばとぐるなりと信じて」とある。この場合、「人」は何であるかというところ「念仏まふさんとおもひたつ」念仏の衆生である。人とは念仏の衆生である。そうですから、これ以外に条件はない。

念仏以外に条件はないから、「老少善悪のひとをえらばれず」あらゆる人々、老であろうが少であろうが、善人であろうが悪人であろうがそういうことはえらばない。ただ信の一本道、信の一筋「ただ信心を要とすとしるべし」。「念仏まふさんとおもいたつところ」。それから時はいつ

であるかというところ、「おもひたつところのをこるとき」である。

「人」というのは念仏の衆生である。「時」というのは「念仏まうさんとおもひたつところのおこるとき」である。

「念仏まうす」ということ、これは「まうす」という言葉ですから、口で称えることである。称名である。「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えることである。

子供で言えば、「お母ちゃん。お母ちゃん」と呼ぶことですね。しかしただ鸚鵡の人まねのようにただ「お母ちゃん。お母ちゃん」と声だけ出しているのではないのでしょうか。

言葉としては「ただ口で称える」であるが、同時にこれは「憶念」である。

もともと念仏というのは「念」の方が主だったので、うですね。つまり仏さまを思う「真身観」のところでも、「雑想観」のところでも「観」というのは、ズーッと仏の姿をあらゆる立場で仏の姿を頭の中でグーッと思っで深い瞑想に入ることらしい。つまり仏を思う。すると眼の前に仏の姿がありありと見えてくるということ。それは「想う」のであって、「言う」ことではな かった。

口で言うことではない。

それを浄土教では、口で言うほうに強く取り出して来たのである。「まうす」というのであるから、口で称えるから「称名」であるが、同時にそれは「憶念」である。

この憶念を強く言われたのが蓮如上人だと思うのですね。親鸞聖人としては、そこまでの問題はなかったのだが、この時代になると、時代の移りかわりによって、いろいろ「口で称えるだけでは・・・」という問題が出て来たので、その時代としては憶念ということが非常に強く言われたというのですが、それは別として。

蓮如上人のお言葉は「こころをひとつにして、阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、さらに余のかたへこころをふらず、一心一向に、仏たすけたまえともうさん衆生をば」仏は必ず救いとして離さない、こういうように親切に言っておられる。この言葉は私が子どもの時に母の膝に抱かれて、お寺でよく聞かされて言葉ですね。いまの若い人にしては、ちよつとこの言葉は古めかしくてピンとこないかも知れないけれども・・・(テープ中絶)

この世に生まれたから生きているのだが、一体生きているということはどういうことかと。明けても暮れても

食糧難で、あまりパツしない暮らしをズーツと続けて行かなければならない。親、子、孫とそれをズーツと繰り返してきているのだと。ちよつと今考えてみてもゾツとするような感じがしますね。一代だけなら、まあ我慢出来るけれども、親子代々代々親が百姓なら子も百姓、孫も百姓と同じことをやっていかなければならない。そういう中で生きて行く。そういうときに、そういうことを背景にして生きて行く。そこを・・・(テープ中絶)・・・

しょっちゅうこういうことが出て来る。けども、時間と共にこう行くしか仕様がな。誰もこれをどうこう取り上げてくれる者がな。そういう淋しい人生である。というときに、いやそうではないのだと。ここ(図Ⅱの線 a の上の世界)の動きがこちら(下の世界)へピンピンと受け取ってくれているものがあるのだと、「叩けよ、さらば開かれん」という応答を、しょっちゅうこちらはしているのだぞと。そういうことに、もし気がつかされなければ、この生そのものの姿はちつとも変わりようはないけれども、しかし、どれほどかこの生そのものが、何らかの意味で裏付けられて力強くなっていくことだろう。

そういう気持ちを考えてみると、他のほうには心を振らずに一心一向に、しっかりとこの（a）線を忘れるな。しっかりとこの線忘れるな、その限りこちらは決してこれを見放さないぞ。ここで「すがる（継る）」という気持ちが分かりますね。すがるといふ気持ちが、この線に対して。それがつまり信である。蓮如上人はそういう言葉で憶念ということを大切にされた。憶念ということは、こちら（線 a の下の世界）のことを憶うということなのである。こういう言葉を憶うということなのである。

「一心一向に、仏たすけたまえ」ということは裏から言うと、一番初めに申しました仏の願を、こちらから言えば「助けたまえ」ということが、仏の方からは「たすけよう」、「撰取不捨する」というあの言葉ですが、その願を憶うこと、それが「憶念」である。仏を憶うこととこのは願を憶うことである。

「お母ちゃん」ということは、お母ちゃんの心を思うこと。ところがお母ちゃんの心を思うことは、もうその前にすでにお母ちゃんの心がこちらを思っていることなのである。こちらがお母ちゃんと呼ぶということはその前にお母ちゃんが先にこちらを呼んでしまっている呼んでいることなのである。お母ちゃんが呼んでいる呼び

声はこちらに届いたのが、それが憶念なのである。

『歎異抄』では、「憶念を包んでの称名である」と曾我先生は説明しておられます。空念仏ではない。「南無阿弥陀仏」と声さえ出せば良いというものではない。「南無阿弥陀仏」と言うときには、もうすでに願そのものがこちらの身体の中に入っている。願を憶っている、願を憶っているのが、「南無阿弥陀仏」という声になるのだ。だから「念仏まうさんとおもひたつころのおこるとき」が、すなわち憶念である。

「念仏まうさん」というのが、強いて区別すれば「称名」である。「念仏もうさん」ということが、口で「南無阿弥陀仏」と言うことであるとすれば、「おもひたつ」は本願を憶念する。願を憶うことである。こちらの方から願を憶うということは、すでにお誓いの心がそのまま、つまり親心そのまま「おんもひたつころ」になっている訳ですね。むこうの「救ってやろう」という心がそのまま「おもひたつころ」になっている。向こうの「救ってやろう」というところが、こちらの念仏の心になっている。

言い換えれば、「おもひたつころ」が、即、これが念仏である。つまり憶念と称名とが一つなのである。従っ

て憶念は、称名のもとであり、始めである。念仏の中に念仏を内面化して、(曾我先生はよくこの「内面化」という言葉を言われますが、金子先生もそうですが) 如来の深い憶念を見いだす。

この内面化ということはさきの絵で画くと、内面とはこの上の世界の内側にはいつて来るようですが、逆にこの(a)線を突き抜けて向こうの無為の世界へ入ることなのでしょね。この上の世界だけではどんなに内へ入ってもそれは内面化にはならない。内的反省になっても、それはこの上の世界の中での内面であるから、これは外である。内面というのは、この下の世界に入ることである、これが内面化である。こうとでも言わなければ、ちよつと辻褃が合わなくなりますね。第一章の一番中心的な問題は、大体その辺のところだと思ふのですが。

その次ぎ、「弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし」、これを信心為本と言われていますね。信心を本とする。つまり念仏為本か、信心為本という問題が出て来るが、これは信心為本である。

そこに「老少善悪」と書いてあるけれども、この場合どちらが問題かという「善悪」が問題なのである。

「老少」は付けたりだと、こう曾我先生は言っておられる。ただ一般仏教としては、老人と若い者とはというと、仏教としては若い者の方が歓迎されている。老人はあまり歓迎されておらないと言っておられる。つまり老人は長い間の人生で癖がついている。痛いすねこう言われると。それから気力がない。その通りである。自分であるつもりでいても、年ごとにハッキリともう気力がないことが分かっている。顔一つ洗うにも、前とは三倍時間がかかりますね、外から見たらわざわざ時間をかけてやっているように見えると思うのです。こちらはそれでも一生懸命に、慌てて慌ててやっているのですけれども。僕らも思い出してみると、お爺ちゃんなどがやっているのを見て、グズグズやっているなあもつと早くしないかなあなどとよく思ったものですね。いつの間にか、その通り自分がやっている、ハツと思わされる。

それから一番辛いことは、菩提心がないというのだ。これは老人は長い人生の癖がついている。つまり固まってしまっているということでしょう。汽車に乗っていて年寄りの人と会ったときに、時々そう思いますね。いい人なのである。いい人なのであるけれどもけれども、話しているともう一言、二言話しされたときに、ちゃんと

分かる。この人は物事をどういう立場で見る人かということが、パッと分かりますね。そうするとこっちも話をするときに、それに合わせてしなければならぬ。ところが高等学校の生徒くらいの人が前に座っていると、どっから話したらいいか分からない。どっから話してでも入り込めるような気がする。ところが田舎のお爺ちゃん、お婆ちゃんは、親しみのあるいい人なのだけれども、話をするときにはこちらもちやんと一定の角度をもって、向こうと合わせたところで話し合う。ああなったら困ると思うのですが、精神的なほうにその固まりが来てしまふと、先の図で言うと、この生をこのままこっちへ（線bの矢印）持つて行こうとしている。全然こっち（線cの矢印）を向こうとしない。もうこういう癖がついてしまっている。朝起きたらこっち（線b）を見る。この人は今まではこういうものが（図Ⅰの波形）あったのでしようが、このときにはこれがこっちへ行き、あるいはこれがこっちへ行くと、こういう脱線があったから、何かここ（下の世界）と関係する縁が出て来るのだけれども。しかしこれを突き抜けると身投げしようかということになるのかも知れない、自殺しようかということになるかも知れない。人と喧嘩するにしても、我知らず相手を刺

し殺すとか、あるいは相手を殴ってしまったとかということになるかも知れない。けれども、固まるともうそこまでは行かない。もうこうなってしまうから。従って、この距離が、この空間が意味をなさなくなる。上の世界だけになってしまつて、こっちへ（図Ⅱ線d）行ってしまうから、菩提心が無い。そこに戸があるのに、叩けば開くはずなのに、そこまで手が行かないで、こっちへ（線d）こう行ってしまう。このように曾我先生は言っておられる。

われわれ老人はですね。従つて若々しい「老少」の「少」の方が、本来の仏教一般、特に聖道門としては、坐禅をしたり、いろいろな修行をしなければなりませんから、比叡山の山を歩くように、最後には一日二十里以上もズーツとぶつつづけで、ほとんど不眠不休で歩かなければならない。とても年寄りでできることではない。若い者でなければ出来ない。

けれども、この弥陀の立場ではそういう「老少」をえらばないと、こう言う。これは平等だ。ここで考え直さなければならぬでしょうね。こういう老人の、固まつて全然こちら（下の世界）とも縁のないような人、われわれ自身がその通りなのだが、これに対しても平等

に見てくれる。平等に憐み助けてくれる。若い者でなければ駄目だとは言わない。

「善悪のひとをえらばれず」というのは、これも今ままでしょっちゅう出て来た問題ですが、定散自力の迷いを解こうとするものである。自信、自力を捨てる、「本願に信順」すればよい。「本願に随順」するだけでよい。

四 「罪悪深重 煩惱熾盛」

定散自力とは何であるかというところ、今までしょっちゅう出て来たわけですが、この生にいて、この生を下の世界の方向に運んで行くときに、何かやはり気掛かりが起こる。なにかもう少しスムーズにスーッと行かないものか、これをスムーズに行くためには何か方法はないだろうか

。俺の心が怒りっぽいからいけないのだから、もう少し怒らないようにする。俺の心がどうも欲が深いからこういう問題が起こってくるのだから、欲をなくしようとする。もう少し落ち着きがないから、生活が整はないのだから、一つ心を鎮めるのに坐禅でもしてみようか。その心はいいようであるけれども、これ自身に問題がある。その問題を自分自身で解決しようというところに無理が

ある。

というのはその人自身の中に既に疑いを持っている。その人自身の中から疑いが起こっているというこの疑いは、どこから出るのだろうか。疑いの出所がどこにあるはずなのである。その疑いの出所は、実は下の世界にあるのでしょね。この下の世界が、何らかの形でこちら上の世界に響いていて、それがその人自身に疑いを起こさせる。そこまではないな。その疑いを、下の世界から促されているものを気が付かないで、自分で解決しようとするから、疑いがかえって疑いを生み出す。疑いがプラス、プラスになる。疑いが更に疑いを生み、更に疑いを生む。

これが、しっかりしている人はしっかりしているだけ、余計に問題が強くなる。真面目な人は真面目な人だけに余計、その問題が厳しくなる。それが自信・自力ですね。そうして最後には、いや、俺は悟ったとか、自分で世界を開いたというつもりが、実はこれに（線aと下の世界）届かない。この上の世界の中だけの、生自体だけの変化に終わりがちである。つまり、上の世界と下の世界との接触が来ない。

しかし、この疑い自身が起こるということは、すでに

もう下の世界からの響きが来て、疑いが起こされているのだから、下の世界の声にそのまま随える、本願に随順すればよい。随順するためには、自信、自力をすてて、「あつ、そうだっか。そうだ俺の問題を俺で解決しよう」ということ自体が間違っていたのだ」と。じゃあ、そういう自分を捨てて、疑いの起こるその疑いの起こるままに、こちらの声に随順しようと、それが「善悪のひとをえらばれず」ですな。

そういう随順をしたときにはじめて、「あつ、俺は今までとんでもないことやっていた。全く見当違いのことをやっていた」つまり、この世での疑いを晴らすために、世の中に言わば八つ当りをしていた。それが罪悪である。罪悪感である。泥棒したとか、人と喧嘩したとかいうことを罪悪と言っているわけではないのですな。悪かっただと思っただけに、そのもとは煩惱だったということなのです。生活がこういうように激化していくのは、煩惱のせいであった。煩惱熾盛、煩惱が盛んである。罪悪深重、自分がそれが分からなかったものだから、自分で世の中に非常に迷惑をかけて来ている。自分の動きがとれないということだけは、世の中の周囲をも動きがとれないよう

に、何らかの意味でして来ているのだと。それが罪悪である。罪悪深重である。

そのもとはと言うと、煩惱のためなのである。煩惱熾盛だ。煩惱が熾盛であるということは、これは身である。体である。心ではなく身である。つまり自身である。そう分かったときに、自分の存在即罪悪。罪悪深重・煩惱熾盛そのものなので、そう分からされた時に、それに気づかされたときということが、それが宿業感である。

宿業感ということとは、この生が われ賢しと思つてここ（図Ⅱ点イ）まで生きて来た生が、気がつかされてみれば罪悪深重・煩惱熾盛そのものであると気がつかされたとき、そういう生がここ（点ロ）に、何故ここに現在来ているのか。何故俺がここに居るのだと気がつかされたことが宿業なのだ。それが宿業感なのだ。ということとは、そういう宿業感が出たということとは、こちら（点ロ）において、これは聞かされる。

つまりこういう姿が気づかされるといふことは、この場合、本願の光ということ。本願の光に照らされて自身自身の姿に気づかされる。このような真つ暗な暗闇を通

って来た自分だったか。いままでのその暗闇の中を、強引に自分は分かっている、自分は賢い、自分は強いと思っ
て来たのが、あにはからんや、四方八方に迷惑をかけて
いる。ここまで来させもらったのだと、そういう暗い、
真っ暗な自分であったかという事に気付かせられた。
その時には、もう既に、光によって気付かせられていた。
だから宿業感が起こったときには、これを親鸞聖人は「弥
陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば」、他人のためでは
なかったと。隣近所の人のことではなかった。隣近所の
人のことではなかった。「ひとへに親鸞一人がためなり
けり」。

親鸞自身がそこに出ていますね。発見された、見いだ
された親鸞というものは、罪悪深重煩惱熾盛の身体以外
の何者でもなかった。そういうものが照らし出された。
照らし出されたてみて、ホッと気が付いたら、弥陀の五
劫思惟の願というのは誰を救うのか、一切衆生を救うと
いうのは誰を救うのかと思っ
て見たら、あにはからんや
この真っ暗な私自身を照らし出す、親鸞一人のための本
願であったと。そういう事に気づかされた。言い換え
れば、親鸞はこの場合「念仏の本願の歴史の中に自分自
身、つまり宿業の自分自身を発見した」。これを「機の深

信」と言っている。法の深信に対して機の深信と言っ
ている。「機の深信」これが宿業の自覚である。第一章はそ
の意味の宿業の自覚である。あるいは、同じことでは
れども宿業の自覚ということは、自分自身が本願の歴史
の中に自分自身を発見するとうこと。それが生きた浄土
真宗、いわゆる思想としての浄土真宗ではないのであつ
て、現実に生きている浄土真宗、親鸞聖人が本当にこの
声を出したということなのです。

こう言われたときの親鸞聖人に、僕なら僕が縫ってい
たら、それがそこにそのまま念仏が生きて働いていたの
でしょう。念仏がそのままそこに聞こえただろうと思
いますね。信仰はどうだとか、信心はどうか、などと言
う必要はないですね。親鸞聖人の手を握っていたら、そ
のままこちらに歴史的に來ている信そのものが、こちらへ
もおそらく伝わったのだらうと思う。唯円はそういう体
験をして來たのでしよう。親鸞聖人に直接追い付いて來
て。それをいまここで、親鸞聖人のお言葉をそのまま書
くことを通して、耳の底に留まるところを書き残したの
が、この『歎異抄』です。

以上